田代初「話之覚」（明治十四年一月　同志社女学校における「奨励の覚書」）

坂本清音

Ⅰ　明治初期の同志社女学校での学内礼拝（「奨励」）について

以下は、岸和田市教育委員会に保存されている田代初の「話之覚」の書き下し文である。ちょうど初が卒業する一年前の春学期（明治14年1月～3月）の「奨励」[1]の時間に聞いた内容を、覚書として記録していたものである。

幸運にも、明治13～14年にかけて、同志社女学校で実施されていた時間割を、前年度報告として明治14年5月に、スタークウェザーが本国に報告した文が残っている。それによると、毎週火曜（1年生対象）と金曜（2年生対象）の午後3時半から4時まで、新島襄による「奨励」が行われていたことが記されている。

しかし、初の覚書により、同年度の春学期には、新島だけでなく宮川経輝、加藤勇次郎、A・J・スタークウェザーらが交替で、火・水・木・金の4日間、「奨励」を行っていたことが分かる。それまでは新島だけで学年ごと週1回であった「奨励」の時間が、この学期から（あるいは、この学期だけは）、週に4回、教師4人で受け持つことになったのであろうか。

ただし、当該期間の全ての「奨励」が記録されたか否かは断定できない。書き留められているのは、16回分だけで、各月1回ずつ火・水・木・金と4日続けて、（1月は3日間だけで18～20日、2月は22～25日、3月は1～4日）であり、後は主日（安息日）礼拝4回分である。従って、一種の宗教教育強調週間的行事であったと解することもできる。

計16回のうち、新島の分担は4回であり、初回の1月18日（火）と、主日礼拝3回（2月20日・3月6日・13日）である。後の3人のうち、教頭の宮川経輝は一番多くて7回、加藤勇次郎は新島と同じ4回、スタークウェザーは、日本語が難しかったのか、1回だけである。

Ⅱ　「奨励」の内容

なお、原則として冒頭に聖句の個所は記されている（間違っているのもある）が、どの回にも「奨励題」は付いていない。

以下に、日付・奨励者名・聖書個所（書き間違いは訂正したもの）と、それぞれの主題を短く纏めておく。

①M14・1・18（火）（新島）［マタイ伝　6・28］女性の徳は謙遜である。高ぶってはならない。皆で力を合わせると汚れた世を清らかにすることが出来る。

②M14・1・19（水）（宮川）［出エジプト記　3・5］　礼儀正しく、心を静めて神の声を聞かねばならぬ。

③M14・1・20（木）（宮川）［ペテロ前書　2・1～2］　乳児が母親の乳を慕うように、ひたすら主を慕うことが大切である。

④M14・2・20（日）（新島）［マルコ伝 3・31～35］ イエスの親族になるためには、しっかり勉強すること。小事（例えば、学校の規則）を大切に、心を聖霊で満たし、神のみ旨に従うこと。

⑤M14・2・22（火）（加藤）［コリント前書 1・12］ 学校内部の一致が大切。志を立ててくじけず勉強せよ。

⑥M14・2・23（水）（宮川）［聖句なし］ 近畿の男学生は意気地なしだが、女学生は進取の気性もあり、よく頑張っている。牛乳や牛肉を摂ることの大切さ。

⑦M14・2・24（木）（加藤）［黙示録 2・23?］ 志を立てることが必要。顔についた墨はすぐに拭けるが、心の中の墨を取り除くことは難しい。神は何でもご存じである。人の悪口を言わないように。

⑧M14・2・25（金）（宮川）［使徒行伝 20・31／35］ 受くるよりは与えるが幸いなり。金持ちで、家からいろいろ送って来るが、独り占めする女学生と、給費生として入学し、よく働き、病人の世話などよくする生徒と、どちらが皆に愛され、幸せか?

⑨M14・2・27（日）（宮川）［コリント前書 13・13］ 望みを失わないことが大切。信者は先に望みがあるので、死ぬのが怖くない。勉強が難し過ぎると言って、始めから望みを失ってはならぬ。

⑩M14・3・1（火）（加藤）［ヨハネ伝ニコデモの話 3・1～3］ 魂が生まれ変わることが大切。身を修める勉強をしないと、偉い人になれぬ。

⑪M14・3・2（水）（宮川）［ローマ書 5・5、ヘブライ書 11・1］ 何事にも表と裏（幸と不幸）があるが、望みを持っていたら、何度でもやり直せる。

⑫M14・3・3（木）（スタークウェザー）［聖句なし］（ヨハネ伝21・15）聖霊によって魂も強くなる。飢え渇くごとく慕うことが肝要。食べた物はよく咀嚼する（実行する）ことが大切。イエスは羊飼いで、今出川

近辺にも羊は沢山いる。

⑬M14・3・4（金）（宮川）［ダニエル書 1・8］ 1日の事、1週間のことを、計画を立てて実行する事が大切。死を迎える頃に、「どうしよう」と思っても遅すぎる。早くから終りの日のことを考えておかねばならぬ。

⑭M14・3・6（日）（新島）［コリント前書 13・3～6］ 愛がなければ、どんないいことをしても益はない。神の助けをより頼んで生きることが重要。

⑮M14・3・13（日）（新島）［詩篇 118・22］ 信仰もしっかりとした土台が大切。心がふらつかないでいるためには、キリストに拠らねばならぬ。

⑯M14・3・15（火）（加藤）［聖句なし］ 熊本では奢侈をやめるよう取り決めをした。節倹と吝嗇は異なる。節倹とは、聞いたことを憶えて置くことでもある。目に見えぬ時間は、特に倹約が必要。

⑰M14・3・16（水）日付のみ

以上の要約から、「奨励」では、女学校での生活面での実例を挙げながら、学習面と精神面（信仰面）の両面から、生徒たちに考えることを教えようとしていることが分かる。

宮川・加藤には、目標を決めてこつこつと勉強をする大切さとか、洋食（牛肉・牛乳）の勧めとか、悪口を言わないようにとか、時間の使い方とか、寮の日常生活に即した教えが多く語られるのに対し、新島の場合は、主日礼拝が多かったこともあるが、聖書に基づく解き明かしが中心になっている。またスタークウェザーには、聖書に出てくる、羊と羊飼いの例を用いて話すのが説明しやすかったのだろうし、最後に、今出川近辺にいる子供たちにも伝道する必要を述べているのは、さすが宣教師である。

「奨励」の中では全体的に、西洋人男女の実例が多く挙げられているのが特徴であるが、特に、2月27日と3月2日の宮川の場合には、『西国立志編』（原名「自助論」、中村正直訳述、一八七一年）からの人物が集中して取り上げられている。宮川の発音が悪かったのか、初にとって、初めて聞く西洋人の名前は聞きとりにくかったのか、名前の表記はずいぶん異なっている（もともと宮川自身、人名はあまり重要だと考えていなかったのかもしれない）。しかしながら、「奨励」の中で、宮川が「『西国立志編』など読むと…」と、本著に言及していることと、初が記録しているエピソードの内容は『西国立志編』に登場する人物の話とそっくりそのままなので、人名を探し当てて、下段で註として説明した。明治4年出版のこの書物は、世界中で、また日本で、大変よく読まれた書物なので、女学生に対する「奨励」にも相応しいと、宮川は考えたのであろうか。

下段には、人名の註のほかに、聖句の引用箇所を『新約全書』（米国聖書会社一八八〇年）から書き出しておいた。当時、生徒が各自の聖書を持っていたとは到底考えられないし、耳で聞いて書き写すだけでは間違いが生ずるのは当然であろう。残念ながら、この年の前後に同志社女学校で使用されていた「聖書」の特定はできていないが、前年の明治13年4月には新約聖書翻訳委員会による『新約全書』が出版されており、その翻訳委員の中には、アメリカン・ボードのD・C・グリーンも入っていたので、女学校でもこの聖書が使用されていた可能性は高い。（スタークウェザーの奨励で聖句が無いのは、彼女は『新約全書』でなく、英訳聖書を用いていたためであろう）。なお旧約聖書に関しては、翻訳委員会による5冊本は明治21年2月まで出版されないので、「明治元訳」と文体が比較的近い『文語訳聖書』から書き出した。

ともかく、明治14年の春学期に実施された計16回の奨励のまとめが、田代初により、保存されていた意義は

計り知れないくらい大きい。

なお、田代初の略歴および同志社女学校との関係は、本誌「初期同志社の岸和田伝道の初穂―女学校第一回卒業生、山岡登茂と田代初の場合―」を参照されたい。

以下に、「話之覚」原文を紹介するにあたって、留意したことを記して置く。

先ず第一に、女学生の残した覚書であるという性質上、正確な翻刻文を作成するというよりは、大意をとることを第一とした。実際に、急いで書きとめた所為か（聞いた後、改めて清書したものとは考え難い）、聞き間違い、書き間違いと思われる箇所や、明らかに書き損じ（文字の書き間違い）の個所が所々に見られた。

ということから、今回の資料紹介は「書き下し文」で紹介することとし、原則として、以下の凡例に従った。

〈凡例〉

①句読点は出来るだけ入れ、カタカナの助詞「ニ」「ハ」は平仮名にし、濁点、半濁点を加え、促音については小書きの「っ」に変えた。

②旧かなづかいをそのままにしたために読みにくくなった個所は、ルビの形で、「振り漢字」や「振り仮名」を施した。

③その場合、各頁の初出に1度だけ、つけることにした。

④判読不能な文字は□で表した

⑤判読に際し、訂正補筆した語はアミカケで示した。

⑥文中に出てくる「‖」は、原資料の丁の最末尾を示している。

注

（1）スタークウェザーがボード本部に報告している「京都の女学校報告」の中の「一八八〇年度同志社女学校一日の時間割」に午後三時半―四時は、新島による〝shorei〟と記されている。当時から同志社女学校礼拝時の話は「奨励」と名付けられていた。

参考文献

鈴木範久『聖書の日本語―翻訳の歴史』岩波書店　二〇〇六年

〈謝辞〉

田代初筆「話之覚」は岸和田市教育委員会所蔵資料であり、今回岸和田市教育委員会の許可を得て、本誌に掲載出来たことに御礼申し上げます。

なお原文を書き下し文に直すに際し、同志社女子大学史料室事務室の北島博子様および滋賀短大名誉教授日比恵子様にお世話になりました。謹んで謝意を表します。

（表紙）
「明治十四年一月
話之覚」
（とびら）
明治十四年一月
火・水・木・金曜日の朝毎に
教師たちより聞きし話のおぼへ
田代はつ
（本文）
火曜日　明治十四年一月十八日
新島様のはなし
馬太伝五章二十八節
ソロモンといふ人はタビデの子にして
世界中の栄華を極めたり。
されども、ゆりの花に及ばざりし。
野にあるゆりは奇麗なるも□
うつむきへりくだるなり。今、女の
道徳にゆりをたとへ、女は如何

（馬太伝6・28～29）五章は六章の間違い。
また何故に衣のことを思わづらふや野の百合花は如何して育かを思へ労ず紡がざる也われ爾曹に告んソロモンの栄華の極の時だにも其装この花の一に及ざりき

ほど学問ができるとも、此の百合の如く、道徳の宜しきほどけんそんにあらねばならん。

新島様え(叡)い山より下りになる時、路をまちがへ、きこりも(樵)』いかぬやうのはしに、メーフラオルがさ(咲)き、いかにもうるはしく地にはい(這)、こまかき花にて、さほどうるはしからぬやうなれども、よく〳〵みれば、まことにうるはしく、遂に、家におもちかへりになりたりと。又、あるひとのはなしに、いづみ(泉)よりすこしの水がながれ、岩の間におち、其(その)水、大になり、冬になり、こほり(氷)て大なる岩をわり(割)たりと。此(この)前にい(言)へる、ゆり又メーフラオルは、女の道徳にたとへられん。いかほど(如何程)うるはしくあるとも高ぶらず、けん

メーフラオル→メイフラワー（五月に咲く花）。サンザシ、ツツジなど。

そんなり。又其水の如く、すこ』
しのものにても、遂に大きくなり、
大なる岩もわりたれば、我共も
一人ではできずとも、此学校のもの
こぞつてはたらひたならば、此
きたなき世を、きよらかにするこ
とができます。夫ゆえ、我共、どの
やうにうるはしく道徳をそ
なふるとも、けんそんにせねばならん。

水曜日　十九日　宮川様

埃及を出る記三章
古しモーゼがきよき地にゆきし時、
神あらわれ、此処はきよき地
ゆえ、なんぢくつをはけと
おほせられたり。ユダヤにては、』
やはり日本のやうに、ざうりを
はきたり。我共もたつとき、

〈出エジプト記3・5〉
神いひ給ひけるは此に近よるなかれ汝の
足より履を脱ぐべし汝が立つ処は聖き地
なればなり
（聖句では、「履を脱ぐべし」となってい
るが、宮川は「履をはけ」と言っている）

人の前に出(いで)し時には、さいけいれい(最敬礼)を行はねばなりません。たとへば、今天し(子)のまへに出づるに、はかまもつけず、はおりもき(羽織着)づして参るなれば、だまっておるものなし(者)。必ずたつとき、れいぎ(礼儀)をおこなはねばなりません。我々神の前に出る時は、なおさらさいけい(最敬)礼を行なはねばなりません。されば、いのり(祈)の時には、必ず心より神のことをかんがへ、其の時ねむりたりなぞしてはなりません。宮川様、』

或日、我共集(あつまり)よりの帰りを見ておひ(出)でになりましたが、話の事を思ふておるやうな時は、しづかにして帰り、又、何にも心になくして帰る時は、大分やかましく話

をしてかへる。宮川様は、私共の悪を見出す為に見なさったのでなく、如何して私共が帰ると思ふて、御らんになりしなり。夫ゆえ、私共よくきをつけ、集りなどの時には、ずいぶんしづかにして、神の事をかんがへねばなりません。』

木曜日　廿日　宮川様

彼得前書二章之一節より

おさなごの父をしたふ如く、なんぢら心をやしなふ、まことの父をしたふべし。私共おさなごの時には、母にたより、其の他たよるべきものなかりし。又、おさなごがなけば、其母もじきに乳がのみたきと

（彼得前書2・1～2）

是故に爾曹すべての怨恨すべての詭譎また偽善娼嫉および諸の謗言を棄て今生れし嬰児の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ真乳を慕ふべし此に由て爾曹長て救に至らん

（本文中の「父」は「乳」の聞き間違い。）

いふをよくしるなり。其時だれが行くも、おさなごはなきやまざるなり。又、「か
か」と□おるとき、もし犬がき』たなれば、必ず母親の所へ来り、それであんしんをして居なり。

二月廿日　日曜日　新島様

馬可伝第三章の三十一節

其兄弟と母と、えすをたづねし時、エスは神の旨にしたがふものは、我母我兄弟なりと。ガリラヤ地方にてありし時、カペナアームの近き処、エスの母なぞ居りし処ゆえ、弟子あり。キリストの我母我兄弟にはなれぬが、身うち共したしき近きものおり。エスの言を耳をつけてきかぬ人は、キリストの御心にかなはぬ者なり。六千年

田代初「話之覚」

かか→お母ちゃん

（馬可伝3・31～35）
その兄弟と母と来りて戸外にたち人を遣してイエスを呼しむ（中略）イエス答て曰けるは我母わが兄弟は誰ぞや（中略）それ神の旨に従ふ者は是わが兄弟わが姉妹わが母なり

カペナアーム→カペルナウム（イエス・キリストの生涯に、またその宣教に関係の深い町の一つ。ガリラヤ湖の北西に位置する）

月はたちても、キリストほどたっとき人なし。今天しでも日本では一ばん』
たっとくあるとも、エスにくらぶれば、天と地のちがひあり。さればとて、決して日本の天しをいやしめるにはあらず。
我どもイエスにしたしくありたい。今てんしが学校にきたり、もし
一ばんよくできるものは、我もらはんといはゞ、いかゞよろこぶべきや。そうでなくとも、よくできるものには、ほふびをあたへんとならば、どんな事もしのんで、べんきやう致しましやう。
日本のてんしさへ、さあらば、エスの親兄弟とならば、如何ほどよろこぶならんや。我どもは、宮川様よりメリー・ライヲン、ハナ・モールなどのはなしをきゝ、すぐになりたいと思ふなれど、決してできず。其人たちは、充分』

メリー・ライオン（1797～1849）アメリカで最初の女子教員養成のための学校、マウントホリオーク・セミナリーの創設者。

ハナ・モール（1745～1833）18～19世紀イギリスの著名な女子教育者。19世紀アメリカの女子教育に大きな影響を与えた。

しゅぎやうして、信仰あつくして、
あのやうになりしなり。メリーライヲンの
学校のたちしも、ようひの事にあらず。
くるしみて、皆小さき事に気を付
得しゆえ、あのやうになりしなり。
毎日〳〵きくを□子として行ねば
ならん。大事に正しきものは、小事にも
正しきとあり。学校のきそくなぞ
小さくあるとも、心に気をつけ、おこ
なはねばならん。汝等は世の光な
りとあり。此石のまれなるも、はじめより
かくはなし。小さきむしが、だん〳〵
きづきしなり。東洋の方にたくさん
さんごじまがある。皆これなり。我
々もきりすとの親ぞくとならんには、
小さき事もよく行はねばならん。
新島様、学校へ御出る。いのりして。』
もし我はなしが此の生徒の心にかん

此石→珊瑚のこと

ぜぬならば、私の口をおし(唾)となして被下(くだされ)と。且、どふぞ、同志社の姉妹の心を聖れい(霊)をもつてみたし(満)めて被下と。決してねたみ(妬)そねみ(嫉)なく、よく心にてら(照)し、全く神にしたがふようにして被下、何とぞこれより神のむね(旨)にしたがひ、キリストのしん(親族)ぞくとならん事を。学校のい(祈)のりに、キリスト我々の為にユダヤにくだり、かうべ(頭)をまくらするところもなく、ひざをおくべきところもなしと。

火曜日　二月廿二日　加藤様

コリン多(ト)前書第壱章より

コリンタ人(ト)は、我はパウロよりみちをき(聞)、しゆえ、ペテロのはなしをきかずとも』

よし、又、或人、我はペテロよりき、しゆえ、

（哥林多(コリント)前書1・12）

爾曹(なんじら)おの〳〵我はパウロ我はアポロ我(われ)はケパ我(われ)はキリストに属(ぞく)すと言(いふ)われ之を言(いふ)なり

パウロのは、きかずともよし、なぞとて
あらそいたり。人身きうりを学
び、胃のふと、のふとかんけいある
ものなり。ゆえにかたっぽわるき時は、
又かたっぽもわるし。パウロ其あ
らそふ事をきゝ、此手紙の一章を
かくとき、必ずなみだをこぼして
かきしならん。学校と教会ともに
人があつまる。教会は一週間に二度ぐらい
あつまりはなすなれども、学校にては、
またしたしく毎日ともにありて、
心もよくしり、心ぱいの時には、ともにわけ
るなり。あなた方のうちにあるとは、いふ
わけにはあらねども、どこの学校
にても、とうをくみ、別になる事あり。
松の木のやうなおほいなる木も、元』
小さきまつかさにて、いばらの中やらに
そだち、見へぬやうなれども、風

田代初「話之覚」

人身きうり→人身窮理（江戸時代の蘭学で、生理学のこと）

がふきても、夫(それ)によりて、うごかされず、だん〳〵そだつ。我々もそのやうにならねばならん。古(むか)しの老人ならば、いが(歪)んだ小さき松をこのむなれども、我々も其(その)いがんだまつのやうならず。まっすぐにせい(成)ちやうし、そらにそびへ、いき〳〵として、松のきのはじめ、くろふ(苦労)を思ひし如く、我々もくろふをいとはずにそだつて、神のさかへをあらわさねばならん。我々いかにくるし(苦し)みにあふも、人にいはれるも、己れのたて(立)し目的をとる為に、べん(勉)』きやうするは大切なり。パウロ、我(わが)めあてとするかんむりを得んために、すべてものをすてる(捨)と。我々も此世にあるうちは、小さきかんむり、即一度たてし目的はくじ(挫)かず、志をたて、

松のすべてのいばらをいとはざりし如く、
我々も此世(この)のことをすて、志をとふ(通)して
行なはねばならん。

水曜日　廿三日　宮川様

あなた方は昨日、志をたてねばならんと
いふ事をおきゝなされましたが、
我どもは学校にあるゆえ、かならず
こゝろざしあるならん。然し、人々は
どこの生徒にても、女はしんしゅ(進取)の
気象にとぼ(乏)しひといふなれど、』
そふでもない。そは英学をなすにも、
漢学をなすにも、これまですゝんで
まいりし事をみれば、なひ(無い)といふ
事もなひ。いつたい五畿内の人々は
しんしゅのきしやう(気性)がなひ。かの
戦争の時にも、おさか(大阪)の兵たいは
一ばんよはく(弱)、にげん(逃)とせしなり。

五畿内→畿内（京都に近い、山城・大和・河内・和泉・摂津の五カ国）

しかし、九州の兵たいはつよかりし。
同志社にての書生に、京都の人は
一人もなし。北国或は九州より
来りしなり。大阪地方よりまいりし
しよせいはひどい。一ばんあしくある。
西京のしはん学校の書生は、きれい
なる着物を着、高ぼうしなぞ
かむり、かざりおるなれども、三』
年月とべんきやうするも、第三
リードルがよめないくらひなり。
男にても、そのやうならば、女だから
其のやうだ、といふわけではない。
一つのなきところは、人身きうりを
学びても、守るのきしやうがなき
ゆえ、人身きふりを学び、もはや
食堂のたなの上にある、我、牛肉は
きらい、牛乳はきらい、むぎはきらい
とかいふて居る人は、肉にまけて居る

第三リードル→第三リーダー
同志社女学校では明治十六年頃までモッゴッフィの第一～第五リーダーを使っていた。

なり。我々きらいといふは、我まゝなり。
宮川様も、元(もと)、牛乳がおきらいな
りしが、むりにのみ、今にては、牛乳は
よろこんでのむ。今は、牛肉牛乳なしには、
一日もたち(経)ません、夫(それ)でも、大分からだは『
よは(弱)っておるゆえ、なかったならば
たちませんと。今、其(その)功能の一例を
あ(挙)げんに、熊本より来りし書生
にて、わづか一年斗(と)たゝぬうち、べん
きやうして、のふ(脳)病にかゝり、其人は
牛肉も牛乳も大きらいなりしが、
入院し、「あなた、牛肉をたべねば
み(見込)こみなし」といはれ、夫より、むりに
たべ、すきになり、もはや同志社にて
毎日なく、自分で買ふて、に(煮)て、た
べるやうになった。じやうぶにて、
べんきやうしておひ(出)でなさる。
さらば、あなたがたは、またしやう(しょう)ふと

おはなしなされましやうが、』
まだ夫(それ)だけのべんきやうを
なされません。今からたおれ(倒)しならば、
どむ(どうも)ならん。むぎをたべねば、のふ(脳)は
つよくならん。西洋の人々は、皆むぎを
たべるゆえ、いろ〳〵はつめい(発明)する
人が多くあるなり。

木曜日　廿四日　加藤様

黙示録二章二十三節

加藤様、ある人よりもらいなされし詩あり。
もくしろくの二章の二十三節には、我共は
むこふ(向)にくちざる(朽)たからをたくわへて
ある。私どもは、学校におるうちは、第一リードルに
ある如く、心のざっさう(雑草)をひきぬく(引抜)処なり。
センチユリプラントといふ木は、千年に一ど(度)
ほどさく(咲)なり。此詩に、神は私共に』
被下(くだされ)しものは、小さき地面ほどなり。夫小

（約翰黙示録(ヨハネもくし)２・２３）
聖句該当箇所なし

センチユリプラント

（植）アオノリュウゼツラン。メキシコ原産のリュウゼツラン科の多年草。誤って、百年に一度、花を開くとされた。

さくとも、其のざっさふをぬき、きれいな花をさかせ、梅の花のやみよ(闇夜)にも、にほふ(匂)よき花をさかせゆくなれば、大なるものとなるなり。我々に大切なり。此(この)間、志をたつる事をおはなし申し、又しやのう□の文をよみし。志をたつる事、要用なり。もし志をたてねば、人にていきる(生)も、其(その)かひなし。我々、学校にて、学問するとか、算術するとかいふ事は、毎日するゆえ自然に出来る。しかし、心のべんきやうはむづかしくある。なれど、夫(それ)をおこなわねばならん。こゝに二つの舟あり。一つのふねにはおもりあり。一つの舟には何もなし。ゆえに、行く事能はず。』

一つの舟は、どこなら〳〵といふて、ゆく事は出来る。蒸気きかんは志をたて、すでに行く処なり。夫はなければならん。然し、こうしてあつまつて

要用→肝要

居る内、誰がこゝろざし立ておるか
わからん。然し、神はよくよく御ぞ
んじなり。私にはしらぬ(知)といふものゝ、
多少わかるものなり。皆かほ(顔)の
ちが(違)ふやうに、心もちがふ。又うれ
しひ時には、かほにあらわれ、い(怒)かる時も
かなしむ時も皆あらわる。互ひに
心に気をつけ、もし口に悪をいふ
くせがあるならば、それをかり(刈)つく(尽)さ
ねばならん。蒸気をはたらかして
ゆかねばならん。私共はみづから、かほに(墨)
すみがついておるならば、夫を人より
きづけ(気付)られ、みにくきゆえ、すぐにふく
ならん。然し、夫より大切なる心のすみの
つきたるは、自分にもよくしり、又
人よりきづけられても、ふきとること
むづかしひ。されど、とらねばならん。
もし悪をいふくせあらば、そのざっ(雑)

そふをぬきとり、何事も心のざっ
そふをぬきとり、充分に、こゝろざし
をたて、まっすぐに、おこのふにて
ゆかねばならん。

金曜日　廿五日　宮川様

使徒行伝廿章

パウロわかれる時、わが三年の間、よる
ひるなみだをこぼして、はたら
きし事をおもへ、又てづから』
はたらき、なんぎなものをたすけし
ごとく、なんぢらも、てづからはたらき、なん
ぎなものをたすけといへり。神のことば
にも、うくよりあたうる方がさいわいなり
とあり。今こゝに、二人のむすめがありて、
一人は、まことにうちはかねもちで、学校に入り、
なに不自由なく、ものをおくられ、着物も
充分にあり、けっこうにくらす。然し、うちより

（使徒行伝20・31）
是故に爾曹儆醒せよ我三年のあひだ夜も
昼も断ず涙を流して各人を勧めしことを
憶ふべし
（20・35）
われ爾曹も如此勤労て、柔弱者を扶け且
主イエスの曰給へる受るよりも与るは福
なりとの言を心に記べきを凡の事に於て
示せる也

ものがきても、すこしも人に見せず、あたへず。自分一人にてたべ、又つかふ。一人の人は、きぬの着物などはきねども、木もんのさっぱりしたきものをきて、べんきやうもひとなみはづれてでき、そうして学校のせはにてはいり、このむすめは、常々どうゆふ事をかんがへておるかとおもへば、おぢ、さんはまだみちをしんぜぬ。もはやおわりも』

ちかく、なんどきの事わからずとて、手紙をかく時には、少しつゞ道の事をかき、又、父母は今どうしていなさるだろう。おぢ、様はしんじなさらず。さだめて、しんぱいしておりなさるだろふ。

又、いもうとは、学校へもゆく事できず、必ずうちでつかわれておるだろふとおもひ、其間には、又ごはんたきなぞあたった時には、ひとよりはたらき、水を

おぢ、さん→お祖父さん

くみたりし。ひとの病気の時には、かねもちの人は、何かあげる事はできるなれども、私は其事はできぬゆえ、私のできるだけは、せわ(世話)を致しましやうとあれば、私共はどちらをすき(好き)ましやうか。一人のむすめは、うくるより(受)『あとふ(与う)がさいわいなり、といふ事をわすれたり。夫(それ)ゆえ、かへってそん(損)にて、だれもきらふやうになる。又、一人は、うくるよりあとふるほうがさいわい、といふ事をしり、ものはあたへぬなれども、自ぶんのできるだけ、たすけしゆえ、ひとには(人)あい(愛)せられ、さいわいになる。私共は、いつもうくるよりあとふるほうがさいわい、といふ事をわすれずせねばならん、其(その)事は、一寸にいふ事はできません。

廿七日安息日　宮川様

コリンタ前書十三章十節

今より前、近頃其人の名わからず。或日たくさんなる人がふねにのりてありしが、』かぜがおこり、ひろく西も東もわからず、舟はこわれかゝって、とうとう舟こわれ、たくさんなる人は海にはまり、どちらへいっても、あまりひろくて、ゆく事出来ず、こまりはて、ひどくおよぎたれどもしかたなく、のぞみをうしなひし。はや皆つかれ、しづまんとしたる時に、二人のうたの上手なる人も、其内にあり。くるしみしなれども、其人ふうふにて、のぞみをうしなわず、よろしきこえにて「われたるいわや」といふうたをうたひたれば、又しづみかけたる人も、あたまをあげ、すこしくのぞみをいた

（哥林多前書13・13）十節は十三節の間違い。

それ信仰と望と愛と此三の者は常に在なり（後略）

して、其のこえをきゝいたり。時にさい(幸)』
わいなるかな、むこうより壱(ひと)つの舟が
まいり、夫(それ)によってたくさんの人がすく
われたりと。実に、うたも大切なるものなり。
望が大切といふをはなす(話)。パウロ夫しんこう(信仰)と
のぞみと愛と、此三つの者常々あるなり。此(この)内の
のぞみの事なり。わが人々にきく(聞)に、信者で
あらざる人は、先にのぞみがないから、死す
る事は一ばんおそる(恐)ゝといふ。然し、信
者は先にのぞみあるゆえ、おそれぬ。若(も)
しも、人があす(明日)し(死)ぬといふ事がわかったな
らば、だれもはたらかぬ。今より紀元一千八百
年前、天主教の僧侶せい(聖)書をひき、
一千年に、ほろび(滅)が来るといひ出し
たり。夫ゆえ、九百九十八年・九年の
ころになり、だれもはたらかぬ
やうになりたり。すでに一千年た』
ちたるも、ほろび(滅)こず(来)あまり人民

ほろびが来ると思ひ、はたらかず。食のみしたるゆえ、きゝんがおこり、病にかゝるもの多く、皆それで又、のぞみをうしないたり。今に至るまでほろびは来らざるなり。私共の勉強も余りむつかしひ、とてもあすのべんきやうが出来ぬとみなし、のぞみをうしなふ事もあるならん。然し、できるだけの事をしたならば、必ず出来、且、のぞみをもってしたならば、できるならん。むかしフランスの人にて、ヒークニーといふ人あり。フランスのせとものはきたなひゆえ、其人白くせんとて、火をたきはじめたれども、どうしても白くならず、もはやたく』ものはなくなり、家はだん〳〵まづしくなり、ついに夫をもいとはず、いすなども、やきたり。家内と子供はこまりおれども、

ヒークニー→ベルナード・パリッシイのこと。『西国立志編』第三編（二）に登場する陶工。フランスの磁器が栗色だったのを残念に思い、白色になるまで家の傍に作った窯で焼いた。薪がなくなった時には、家の椅子を火中にくべたりしたので、狂人扱いされたが、最後には成功した。陶器製造に従事して一八年、始めて自分を陶工と称し、器を商品として売ることができた。

（この日と三月二日の奨励で、宮川は『西国立志編』から、数人の例を引用している。）

其人はひとりたきたり。やはり
のぞみをもつて、必ずできると思ひし
ゆえ、大切なるものをも、すて（捨）なしたる
なり。家のものなにもなく（何無）なりし時、幸
なるかな、あけのあさ（明朝）、りっぱにできし
なり。ニートン、ケプロルなども、のぞみをも
って何事もなしたり。ニートンの引力を
発明せしも、容易にあらず。十七年
間かんがへ、ついに見出せしなり。ケプロル
も同じく、十七年間かんがへ、天文の理
を発明せしなり。　　天路歴の』

火曜日　廿九日　加藤様

ヨハネ伝ニコデモのはなし
エスまことに〳〵に汝につげん。人もしあ（イエス）（新）
らたにうまれずば、神の国を見る事
能はじといふ事あり。
先日より、志をたてねばならんとい

ニートン→アイザック・ニュートン（1642～1727）英の哲学者・数学者・物理学者・天文学者。万有引力の発見者。（『西国立志編』第四編三）
ニュートンが物体の運動および万有引力の基礎法則を二大支柱とする理論力学を建設したのは、着想以来20年後のことであった。
ケプロル→ヨハンネス・ケプラー（1571～1630）ドイツの天文学者。惑星運動の3法則の発見者（『西国立志編』第四編三）。ケプラーの三法則はニュートンの万有引力の法則の根拠となっている。
天路歴→ジョン・バニヤン『天路歴程』の事か。
（火曜日廿九日は火曜日三月一日の間違い）
（約翰伝3・1～3）
ユダヤ人の宰（つかさ）にてパリサイのニコデモと云（いへ）る人あり（中略）イエス答（こたへ）て曰けるは誠に実（まこと）に爾（なんぢ）に告（つげ）ん人もし新（あらた）に生（うまれ）ずば、神の国を見（みる）こと能（あたは）はじ

ふ事をきゝましたが、此の生まれかわるは、たましひの事なり。此の事は実に大切なり。

大学者なりしが、父はおち

ぶれて百性になりて居りしが、此人十一才の時より大学を読みしと。其ころは、天しよりしよ人に至るまで、身をもつて之とするといふ事をせねばならん。此ことにかんじて、コーシの如き聖人もこれ』にてせい人になりしならん。人も人我も人なりと。故に是にきをつけ、ひどくべんきやうせしが、不幸にも、父は死せし。其時、伊豫にいたりたりしが、其国の風俗はゲッケンなどするやうあらき風俗にて、其中にべんきやうするものあらざりし。故に日中にべんきやうする能はず。終夜べんきやうしたり。しまいに学者になり、後、近江の国にきたりしが、其のきんぺんの人、其人の行を見てたゞしくなり、親切

しよ人→庶人（庶民のこと）

コーシ→孔子（551～479BC）
中国、儒教の創始者。孔子の思想や事跡を知る根本材料としては『論語』が第一。

日中（ひるぢう）のルビは原文のママ。

なる見て皆トウジユ先生といふ。故に、多くのでし(弟子)もありたり。此人のかくなりしも、全く身をおさむるを以て、之とせしをもってなり。人は皆、身をおさむるをもって之とせねば、よきえらい人となる事そまぬ。人よりすゝめられてなりはならぬ。ながれていって、いはに(岩)あたるでなくば、いけぬ』

水曜日　三月二日　宮川様

ローマ書五章之(の)五節

望ははぢを来らせず。

ヘブライ書十一章の一節

一年の中には、天気のよいときもわるい日もある。しかるに、どちらが多か(おおい)といふに、よい方が沢山なり。何にしても、おもてとうらとある。本にても、うらもありおもてもある。

田代初「話之覚」

トウジュ先生→中江藤樹（1608～1648）のこと。江戸時代初期の儒学者、日本における陽明学派の始祖。「近江聖人」と称せられる。

（羅馬伝5・5）

希望は羞(はぢ)を来(きた)らせざるを知(しる)

（希伯来書11・1）

それ信仰(しんかう)は望(のぞ)む所を疑はず未(いま)だ見(み)ざる所を憑拠(まこと)とするもの也

はれてよし、くもりてよし。冨士の山といふ事何にもない。何にもひなたの方が多し、世の中にふさいわいの人も多くある。しかし、そふすると、神之恵はゆきと、かぬやうなれども、神のめぐみの事をかんがへば、めぐみの方が多くある。我々、東京とか大坂とか見物に』行くと、うらやの方を第一にゆくをこのまず。にぎやかなまち、大坂ならば、しんさいばしすじとかの、大道を行ならん。我々も大道を行かねばならぬ。おもてはのぞみ、うらは失ぼうなり。ケパリーといふ人はいんどにゆき、道をひろめ、十六ケ国にせい書をやくせし人なり。此人、或時、御ちそふによばれしが、其のゆきし時、わきにおりし人、ケパリーをあざけりいひ、はづかしめんとていひけるは、此人はくつしの子ならんやと

ケパリー→伝道師カレーのこと。伝法教士加礼は靴工の子であったが、志を立ててインドに行き、学院と一六カ所の説法場を建て、一六種の方言を以て経典を訳出した（『西国立志編』第四編十）。

ヨング→理学者ヤングのこと。ヤングが初めて馬に乗った時、同伴者が高い柵を飛び越えたので、自分も試みて落ちた。一語も言わないで挑戦し、三度目に成功した。「他人の為し得ることは自分も必ずする」と言っていたことの実行だった（『西国立志編』第四編十一）。

いひしに、此人、くつなおしの子なりといひたり。されば、其人（その）、却（かえっ）てはぢをうけたり。此人、五六人のでし（弟子）をおきたり。やはり彼ものぞみをもちしおり。ヨング、ある時友だちと馬にのりて行きし時、馬よりおちたり。しかし、くっせず（屈）。』二三度とびかゝり、とうゝ（乗）のりたり。のぞみありしゆえなり。トマス・キヤリボルは、本をこしらへ、よそへかして（貸）かへして（返）もらい、つくへの上にのせておきしを、下女がほうぐ（反故）と思ひ、もやしてしまいたり。或時、本やしつぱん（屋出版）せんとてまいりしが、見へぬが、かくありたり。しかし、いからず（怒）。又、べんきやうしてかき（書）たり。やはりのぞみありしゆえなり。

ボーツリニー、はく（博）物がく（学）者でありしが、多くの間、山にゆきて鳥をとらへ、はこに入れよそへゆくに付、しんるいへあづけしが、

トマス・キャリボル→カアライルのこと。彼の『佛国革命』第一巻の原稿の話。この原稿を近くに住む文士に貸していたところ、何かの間違いにより、原稿は客間の床上に置かれたまま数週間が過ぎた。カアライルは印刷者より原稿の督促を受け返却を求めた。その結果、下碑が反古紙と思い焚きつけに使ったと分かった。仕方がないので、再びその書を作ったが、それは彼の意志堅固の一例である（『西国立志編』第四編十三）。

ボーツリニー→米国の鳥類学者オージュボンの話。鳥類の図画を一千枚近く描いて木製の箱に収め、家族に託して数カ月旅に出た。帰宅して箱を開くと、ネズミ夫婦が箱全部を占拠し紙を噛み破って子供を育てていた。もう一度森林に出かけ、三年をかけて前よりも優れた図画を描き得たのは、彼の堅忍と熱心の賜物だった（『西国立志編』第四編十二）。

田代初「話之覚」

其(その)内に、ねづみがはいりはね(羽)をくいたり。
然し、又、二度、山にゆき、あつめしなり。
ミスカリトリーといふ人は、父が、おまへの
ような人はべんきやうはできないから、
よせといわれしが、イギリス第一ばんの『
学者となりし。西国立志ヘン(編)など
よむと、ぐじん(愚人)がよくなりし人、多くあり。
ある学者いふ(言)、才子とぐじんの間は、
わづかのちがひなりと。我々、けいこにも
かげひなたあり。学校におる内、けいこ
がむつかし(難し)ひと、もうできぬとて、のぞみを
失ふ。しかし、やすい(易い)ときには、できる見
こみあるゆえに、はげみ(励み)する也。むつ
かしひ時には、うんどうする時は心配して
居りしなり。のぞみは、はぢ(恥)を来
らせずとあれば、のぞんで充分する時は、
はじかく事あるまい。

ミスカリトリー→不詳

木曜日　三月三日　スタクウエーゾル氏

イエス、ペテロにいひけるは、ヨナの子シモンもし汝、われをあいするならば、我羊をかへ。日本にては、羊をあまりかひませんが、此ユダヤにては、羊をかふ事は、つうれいなり。』

母は此やさしひけものを愛し、かひたいと思ひ、父にねがひ、いちばんよい食物をたべさそうと思ひました、アメリカにても、羊をかふなり。此に今、はなさんとするは、にくたいでなく、たましひの食物なり。夫は、御せいれいと神之まことなり。御せいれいによりて、たましいもつよくなる。もし一ばんよい食物を羊にたべさしましても、しぶんでよく〳〵かみ、たべませんならば、何もやくにたちません。我々は、幸毎日かつ安息日毎によいはなしをききますが、夫をしぶんでよく〳〵せいをだして、はたらかせま

田代初「話之覚」

（約翰伝21・15）偖かれら食して後イエスシモンペテロに曰けるはヨナの子シモンよ爾これらの者に過て我を愛するや彼いひけるは主よ然わが爾を愛することは爾知りイエス彼に曰けるは我羔を牧

せねば、何もやく(役)にたちません。かへつて、心がせまくなりましやう。夫ゆえ、毎日きく(聞)ところを、かんで食べねば、むえき(無益)に』なります。羊、すこしづゝたべますれば、大(おお)にためになります。どれほど御ちそうありても、皆、一ときにたべる事できず。夫より、すこしづゝよい者(物)をたべるほうよし。父のいふ(言)、よけ(余計)たべさしてはなりません。少しづゝたべさしてよろし。かわいがって、たくさんたべさしてはなりません。其(その)ひつじ、ひもじなければ、たべません。ひもじければ、したひます。我ども、なるたけかんでたべねばなりません。我々も、うへかわく(飢え渇)如く、たゞしきをしたひ(慕い)ませねば、せっかく、きゝますおしへが、むえきになりましやう。どうしても、うへかわく如く、ぎ(義)をしたふ事はすくなく御座ります。ゆえに、おたがいに、まことをしたいたいと思

ひます。羊の一つのむれ、一つの羊
かひとなるべし。おほかみのなかにある
ひつじをわする、事できません。みちを』
とく人は、みな、おほかみのなかにおります。
夫ゆえ、我ども充分イエスにしたがひ、女に
てもはたらかねばなりません。来みれば、
今出川のところにも、我子とみゆる小
供がたくさんおります。それらの子供を
わするる事出きません。私どもやくに
たゝぬと思ひましたなれども、神は
いのりをきゝたまへば、必ずできるなり。
おとこもをんなも皆、みちびかねばな
りません。イエスは愛する我かふものな
り。

金曜日　四日　宮川氏

ダニエル一章八節

ダニエルは其心に心と口にて王の食物に酒を

（ダニエル書1・8）然るにダニエルは王の用いる饌と王の飲む酒とをもて己の身を汚すまじと心に思ひさだめたれば己の身を汚さゞらしめんことを寺人の長に求む

もって其心をみたさゞりき。此女学校にて「ア、コワ」といふ言は、先年四月ころより始まりしが、今はすこしやみし。』

其のかわり、「どふしようかしらん」といふ言がある。夫は、しっかりして居る時は、そのやうな事はいわぬ。其言は、本心がいはせるなり。其を口にいたさず、心におもふていたいもの。ダニエル王の食物は、大そふおごり居りしが、心におもひ、酒やなにかをたべんとけつじやうしたり。私共は、どふしやふかといわず、朝おき、かほをあらいに行まへ、今日一日の事をかんがへ、又一週間の事は月曜日にかんがへおかねばならん。も一歩進んで、我共の命は、もさきは五十年ほどのものなり。故に、としとりてから、どふしやうといふても、まにあわぬ。わかき時より考へて

「ア、コワ」→「ああ怖わ」

おかねばならん。充分今べんきやう
しておかねばならん。又、大切なる』
事は、我々此命を終り、もし此聖書が
まことならば、我々のよみがへる事もまこと
なり。我々は命の終りし後は、二つの道
あり。一は天国、一はくるしみ。もし、よういせず、
其の時くるしみに至りて、どふしよう、しやう
しらんと思ひ、いふてもまにあわぬ。其時
外人たすけたいとおもひても、たす
けられぬ。ヨハネ三章にも、あらたに生れ
ずば天国に入る事出来ぬ。我々キリ
ストに、どふしようかしらんといふ言を
いはゞ、キリストは、おしへたまふなり。我々
くるしみに至る時、モーセやアブラハムが
来てすくひたひと思ふても、しかたなし。
エス・キリストと聖霊の導きによりて、だ
ん〳〵幸に、どふしようかしらん
といふ言はなくなり、どうぞして終

モーセ→イスラエルの宗教的・民族的英雄。イスラエル民族を率いて出エジプトを果たした。
アブラハム→イスラエル民族の始祖で、彼らの信仰の父と仰がれる人。
どうぞして→どうにかして

りの時の事を思ふやうに、したきしたきものなり。』

日曜日　三月六日　新島氏

コリンタ前書十三章一節より

幾たびよんでも、こうゆふところはおもしろひ。私共ポウロの言をきゝで止まるならば、エス教信者でなし。ひんきうな人をたすけ、又モーアインの如きところに金をいだしたりする。若し、あいなくしてなさば、益なし。私ども此本にある如く、人が学問でもあらばねたみ、よき衣なぞあらばねたみ、又、人より才でもあらば高ぶるなり。又、己れがわるくおこるして、人よりいわれるところあるものらは、やはり愛なきゆえなり。人のよき事は、いふ事をいやがる。然し、わるい事はよろ

（哥林多前書13・3～6）假令われ我すべての所有を施し又焚るゝ為に我が身を予るとも若し愛なくば我に益なし愛は寛容をなし又人の益を図るなり愛は妒まず誇らず驕傲らず非礼を行はず己の利を求めず軽々しく怒らず人の悪を念はず不義を喜ばず真理を喜び

モーアイン→盲唖院（明治11年5月24日、京都に日本最初の「京都盲唖院」が開業した）

こんでいふ。ふぎ(不義)をよろこぶ。町人なぞ、あきないするにうそつき』てよろこ(喜)ぶなり。而して、金もふ(儲け)けする。これ、愛なきゆえなり。

私は、或る時しんぶんを読み、かんじ(感)ました。御ぞんじの通り、エス(イエス)は信かう(仰)の

あつひ(篤い)人なり。ねる時、おくさんに

「私は今日、人のあし(悪)き事をいひしか」と

たづねし。是は、愛のけつくわ(結果)よりいづ(出)るなり。

私共、人の心にさわら(障ら)ぬよふにしてゆくには、やはり愛がなくはいけない。これは神のたすけによらずばいけません。私共は、坂をまるき(丸き)ものがのぼるごとく、ころばるなり。ゆえに、何かたすけはなくばいけぬ。即、神の助をよりたのみゆくならば、たのむ事が出来るなり。』

日曜日　三月十三日　新島氏

詩篇百十八章二十二節

家づくりのすてたる石は、家のすみのおやいしとなる。即、キリストは公会のどだいとなりたまへり。学問にしても、どだいが入用なり。少しの学問なれば、じきに風にふかれ、あっちいへふらり、こちらへふらりする。信かふも、志かり、じよふぶなるしんかふなれば、うごかぬなれども、うすきしんかふなれば、まよふてしまふ。イタリヤの塔は、いまいがんでおるそふです。それはなにかといふに、どだいがすわらなかつたゆえなり。もし、それよりそそふにつくりしなれば、今は、はやたおれしならん。すこしじよぶゆえ、まだたおれん。』

キリストは、私どもの為に、此の世にくだりたまひ、人々よりすてられたまへど、キリストは

（詩篇118・22）
工師のすてたる石はすみの首石となれり。

いつもかわらず、人間をみちびきたまひて、
どこまでも、おし(押)とほ(通)したり。今にては、
どふしても人間の力にて、キリストの道を
うごかす事出来ず、夫(それ)ゆえ、私どもの
心もうごかぬやうにするには、やはり
キリストの道によ(拠)らねばならん。今でも、
世けん(間)の人は心がめくら(盲目)ゆえ、まことの
ものを見て、かへつてにくむ。信者にても、
こちらに大じよふ(丈夫)なると、た□か
なひと、うこか(動)されるなり。まことは
どこまでも、おしとほさねばならん。
然し、ごふじよふ(強情)といふにあらず。そうして
又、夫には柔和謙遜もなければならん。
何にもせよ、キリストによりすがらねば
なりません。

火曜日　三月十五日　加藤氏』
同氏、熊本より御出にて、母より今年度々

手紙を受けなさるが、母の手紙は、父の手紙よりも大に心をうごかす。其手紙に、熊本之お宅之近村にて、せっけん金とするやうにと約束ができしよし。夫は、熊本にては元来きぬのきものなぞきるものは実にすくなくありしが、維新後、大におごりをきわむるやうになり、車ひきも今は一寸そとにいづるに、きぬをまとふやうにもなり。夫にてはどむならんとてやくそくなせしよし。われ〳〵学校にありても、せっけんをせねばならん。さればとて、りんしよくにするにあらず。又、きもの、きたいのをきるといふにあらず。たとへば、たべものなれば、四はいたべるところを三ばいにておき、おなかをすかすは、けんやくにあらず。又、じぶんにもつておるものをはぢにおき、ひとりでたべ、皆たくわへるは、けんやくにあらず。りんしよくなり。それらは、たべるいやしき』

事なれども、第一せっけんするは、きゝた事(聞)
をたくわへるにあり。加藤さん、熊本学校に
おいての時、教師がいふに、汝等はかたっぽ(片)で
きくのはよいが、かたっぽよりぬ(抜)かすは
いけぬといはれたりと。私共も大分
ぬかす事多し。きゝた事をしぎ(じき)に
べチヤ〳〵しやべると、心にたくわ(蓄)へがな
きやうになる、も一つは目に見へぬと
ころのもの、即、時間なり。時かんは、事とに(殊)
つい(費)やしやすきものなり。故に、此の時かんを
充分にけんやくしていかねばならん。

水曜日　十六日

三月十六日（水）日付のみ。